

教科書所収の「羅生門」における脚注の比較

－ 学生の語彙理解に関する一考察 －

A Comparison of Footnotes Appearing in High School
Textbook in the Novel *Rashoumon*
Considerations of Lexical Understanding for students

山 森 泉

基礎学力の低下、特に語彙力の低下は、高等教育機関における講義理解において大きな影響を与えている。そのため、教授する側は、学生の語彙力の実態やレベルを把握したうえで授業を進めていかねばならない。本稿では、高等教育機関において教授する側の参考とすることを目的に、高等学校国語の教科書に収録されており、ほとんどの高校生が学ぶ共通教材である小説「羅生門」の脚注の比較を行った。その結果、時代による差だけでなく、同時代であっても出版社により脚注を付けられた語に差異があるということが明らかになった。この結果を基に、授業時における説明の仕方を含め、今後の語彙指導のあり方を検討していかなければならない。

1. はじめに

今年度、新教育課程で学んできた学生が入学するということになり、各大学では様々な対応を検討し試行的に実践してきている。大学生の基礎学力が低下しているということを実感しつつも、教員側の多くはこれまでは有効な手立てを講じられないまま、シラバスに従って講義や演習を行わなければならなかった。演習・講義など授業形態や専攻領域によるレベルの違いはあるにしても、入学させた学生たちを一定の到達目標にまで何とか押し上げて社会に送り出さなければならぬからである。いくつかの問題点が指摘されてきたが、どのような対策が有効であるかという点についてはこれまでは明確なものがなかった。このような状況の中で、2005年に「日本リメディアル教育学会」が成立した。

小野らが1998年～2000年に行った大学生の日本語語彙力調査では、31の大学・短大・専門学校¹⁾の学生を対象とした約4000人のデータを集計分析している¹⁾。それによると、短期大学・専門学校(6校1012人)の受験者のうち、18.7%が中学生レベルと判定され、61.0%が高校生レベルであり、大学生レベルは20%に過ぎなかった。さらに、中学生レベルと判定された学生の入試形態は、スポーツ推薦での入学者がほとんどであることも明らかにされた。中学生レベルの学生の場合、授業理解に関してどのような問題が生じるかについては、留学生を教える教師に行ったアンケート結果が参考になる。中学生レベルの日本語力であると授業理解が不十分であり、高校生レベルであれば専門的な内容がわからないことはあるが、日常の生活で困難を感じるこ

があまりないという結果を得ている。

田中²⁾は留学生への日本語教育において直面する問題として、

学部レベルでの大講義では、教官が口述で講義し、学生はそれを筆記するという形態が基本であるが、その際まず聞き取りが難しく、その結果筆記が進まないという問題がある。(中略)一つは「知らない言葉が多い」、「同音異義語が多い」といった点に問題がある。

と述べているが、この指摘は、国語力が低下した現在の日本人学生にそのまま当てはまる。特に専門的な内容での講義では、初めて聞く言葉が続出する場合も多い。その際に、ある程度の語彙を持っていれば、類推して意味を考えたり内容を理解したりすることができる。しかしながら、このような理解の仕方ができないということは、土台となる語彙を十分持たない学生が増えているからであろう。田中は、手立てとして、漢字にルビを振るなどは教材開発の前提と考え、さらに通常の辞書には載っていない「法学固有一般用語」の解説を入れた法学用語集の編纂を挙げている。これも留学生対象のことであるが、日本人学生の中にも同様にしないとついていけない学生も増えている。

そこで、本稿では、高等教育の前段階である高等学校では、どの程度の語彙力を高校生に求めているのか、またどの程度の語彙を持っていると考えているのかを判断する一つの材料として、国語の教科書に共通する教材における脚注の比較を行うことにした。これにより、高校生への基本的な語彙力対策が読み取れるのではないかと考えるからである。「羅生門」は、現在も各出版社の「国語総合」³⁾の中に収録されている定番教材である。指導要領の改訂に伴って検定教科書も改訂されるが、今回調査した教科書でいえば、30年以上前から変わっていない教材である。この作品の注に取り上げられた語の変化を通して、「時代の変化、生徒の質や学力に対応した語彙力」という考えがあるかどうかを見ることにした。

2. 国語力低下に関する教師たちの考え

大学に入学する学生の学力低下は入試制度にその一因があるとも言われているが、受験勉強をする過程で学力が低下したわけではない。漢字の書き取りのように単純に暗記して対応できることもあれば、いわゆる読解力などは、一朝一夕で身に付くものではないことは周知の通りである。

それでは、小中高の教師はこの点をどう捉えているのであろうか。一口に「国語力低下」と言うが、一体何をもって「国語力」と判断し、そのどこが、なぜ低下したと捉えているのであろうか。

この点に関しては種々の調査報告があるが、その一つに、平成12年から13年にかけて国立国語施策研究所が実施した「読書教育実態調査」がある。⁴⁾毎年実施している調査ではないためやや古い資料ではあるが、現在と比べて著しく差があるとは考えられない。むしろ、昨今の学力低下問題とあわせて考えてみると、この調査時点より低下していることはあっても好転しているとは考えにくい。これによれば、本を読まない生徒の実態が浮き彫りになってくるだけでなく、書き取りに関しては、「積む」という4年生配当の漢字が書ける高校生が5割しかいないこと、3年生配当の「拾う」を書けるのは8割の高校生に留まるという結果も報告されている。

同時に行った教師への調査では、「あなたが教えている児童生徒は、あなたの子供の頃に比べて、国語の学力が下がったと思いますか」という質問に、中学高校教師の8割が「国語力が低下

した」と感じていることが報告されている。「低下した」と答えた者を対象とした追加質問の「どんな点で学力が低下したか」に対する回答の第一位は「語彙力」であり、62.7%の教師が挙げている（複数回答）。第2位以下は、「文章を書く力」52.5%、「漢字の書き」48.1%、「文章を読む力」48.1%、「聞く力」48.1%であり、「話す力」「敬語」「漢字の読み」という順になる。（表1参照）

小学校教師、中学校教師、中高一貫、高等学校教師と分けて集計した結果では、一位項目が異なっている。小学校では「語彙力」56.3%、中学校では「文章を読む力」61.1%、中高一貫では「文章を書く力」73.1%であり、大学入学直前の高校では「語彙力」が72.7%と高い数字となっている。ちなみに、「語彙力」の不足を指摘するのは、中学校、中・高でも50%を越えており、どの段階においても国語教師は児童・生徒の「語彙力」不足に学力低下の大きな要因があると考えていることが見えてくる。また、「漢字が書けなくなっている」との回答は、高等学校では「語彙力」に次いで多く、回答者の53.0%が挙げている。

表1 特にどんな点で国語の学力が下がったと思いますか。（複数回答）

学校段階	漢字の読み	漢字の書き	語彙力	敬語	文章を書く力	文章を読む力	話す力	聞く力	その他
小学校	20.8	41.7	56.3	43.8	50.0	19.0	41.7	52.1	2.1
中学校	27.8	50.0	50.0	38.9	50.0	61.1	33.3	50.0	5.6
中・高	46.2	46.2	57.7	30.8	73.1	57.7	42.3	42.3	0.0
高等学校	36.4	53.0	72.7	47.0	47.0	42.4	48.5	45.5	9.1
総計	32.3	48.1	62.7	42.4	52.5	48.1	43.7	47.5	5.1

（資料より抜粋して転載）⁵⁾

高校生の学習で語彙力対策が行われていないわけではない。たとえば、『頻出現代文重要語700』⁶⁾などに代表される現代語の単語集の活用がある。著者によれば、「本邦初めての『読解のための』現代文単語帳」である。1991年に初版が出され、これに影響を受けた他の出版社からも類書が出されるようになった。それだけ、言葉の必要を現場教師たちや高校生自身が感じたからであろう。いわゆる慣用句、四字熟語だけでなく、時事問題を反映した外来語であるトラウマ、ストレスなど評論対策の語も含まれている。入試現代文の内容が変わり、環境・医学・情報分野での新語が出題されるようになると、改訂版が出されている。

このように、英単語や古文単語を覚えるのと同様、現代語に関しても受験対策用の語句集が出版され、毎回小テストの範囲を指定されて学習している高校生も多数存在している。しかし、問題集を毎回やってもなかなか定着していない現状がある。単語だけを覚えることにも限界がある。言葉は生きているので、生きた文脈の中で使われて、初めて意味を実感するのではないだろうか。そう考えると、語彙力を増やすために必要なのはありきたりであるが、本や新聞を読むことであるとの結論にならざるを得ない。

では、比較的取り組みやすい小説を教科書で学ぶ際に、高校生にはどの程度の語彙力があると考えて「注」が付けられているのだろうか。次項では、この点に着目して、検定教科書における脚注の比較を二つの面から行った結果を記す。

3. 検定教科書の脚注比較

まず、時代による比較を行うために、学習指導要領の改訂に合わせて編纂された同一出版社の教科書4冊に所収された「羅生門」の脚注を取り出し、下記の一覧表にまとめた。⁷⁾

表2 改訂時期別 語注比較 (Me 社教科書)

表中の印は、〔●：すべてに共通、◎：説明のほかに図がある ○：説明がある ×：注がない〕を示す。

共通		改訂により教科書が施行された年	昭和48年	昭和57年	平成6年	平成15年
		脚注が付けられた語	27	30	31	32
	数	図が付けられた注(◎の語句)の数→	1	2	0	8
●	1	羅生門	○	○	○	○
	2	丹塗(にぬ)り	×	×	○	○
●	3	朱雀大路(すざくおおじ)	○	○	○	○
●	4	市女笠(いちめがさ)	○	○	○	◎
●	5	揉鳥帽子(もみえぼし)	○	○	○	◎
●	6	辻風(つじかぜ)	○	○	○	○
	7	洛中(らくちゅう)	×	×	×	○
●	8	旧記	○	○	○	○
●	9	鷗尾(しび)	◎	◎	○	◎
●	10	襖(あお)	○	○	○	○
●	11	Sentimentalisme (仏)	感傷癖	感傷癖	感傷的な気分	感傷的な気分
●	12	申の刻下がり	○	○	○	○
	13	藁(いらか)	×	×	○	○
●	14	築土(ついじ)	○	○	○	○
●	15	火桶(ひおけ)	○	◎	○	◎
●	16	山吹の汗衫(やまぶき・かざみ)	○	○	○	○
●	17	聖柄の太刀(ひじりづか)	○	○	○	○
	18	やもり	×	○	○	◎
●	19	檜皮色(ひわだいろ)	○	○	○	○
●	20	頭身の毛も太る	○	○	○	○
	21	しらみ	×	×	○	◎
●	22	弩(いしゆみ)	○	○	○	◎
	23	執拗く(しゅうね)	○	○	×	×
●	24	検非違使(けびいし)	○	○	○	○
	25	肉食鳥	×	○	×	×
●	26	藁(ひき)	○	○	○	◎
●	27	なんぼう	○	○	○	○
●	28	四寸	○	○	○	○
●	29	太刀帯の陣(たてわぎ)	○	○	○	○
●	30	疫病(えやみ)	○	○	○	○
●	31	菜料(さいりょう)	○	○	○	○
	32	じゃて	×	○	○	○
●	33	引剥(ひはぎ)	○	○	○	○
●	34	黒洞々たる夜(こくとうとう)	○	○	○	○

教科書所収の「羅生門」における脚注の比較

周知のように「羅生門」は作品の舞台を平安末期としているため、作品世界を描く上で、どうしても古語や古語的表現を用いざるを得ない。そのため、古典に関する語句や生徒になじみのない非日常的な語句に関して、教科書編集委員による脚注が付けられている。また、「羅生門」が発表されたのが大正4年(1915)であることも考え合わせると、現代の若者には分かりにくい語もある。笑い話のような話ではあるが、脚注に記されている語句への注が要するという事態も起こっているのである。

昭和48年の検定教科書での脚注は27であったが、平成15年の教科書における脚注は32であり、5語増加している。一方で、23「執拗く」のように注から外されてしまった語もあるが、後に続く「おしのように」という語との関連で外したと考えられる⁸⁾(表3 ※2参照)。それに加え、言葉での説明だけではなく、「しらみ」「やもり」「ひきがえる」など、実際にはほとんど見る機会がない生き物について図を入れ、より理解しやすいようにとの配慮がされている。また、脚注の説明も、「Sentimentalisme (仏)」をそのまま辞書的に「感傷癖」と載せても最近の生徒には分かりにくいため、平成6年の教科書からは「感傷的な気分」とするなど、生徒の語彙力・知識・理解度を考慮しつつ注が付けられていることが伺える。

では、このような配慮は、どの出版社の教科書においても見られるのであろうか。現在使用されている教科書会社5社(の5冊)について比較を行ったのが、表3である。⁹⁾

表3 平成18年用 出版社別 脚注比較

表中の印は、[●:すべてに共通 ◎:説明のほかに図がある。 ○:説明がある ×:注がない]を示す。

○以外の表記に関しては、脚注がそのような語形であることを表す。

共通	数	脚注が付けられた語の数→	Ti 社	Ta 社	To 社	Me 社	Ki 社
	1	下人	○	×	×	×	○
●	2	羅生門	○	○	○	○	○
	3	丹塗(にぬ)り	×	○丹	×	○	○丹
	4	きりぎりす	○	×	蟋蟀○	×	×
●	5	朱雀大路(すぎくおおじ)	○	○	○	○	○
●	6	市女笠(いちめがさ)	◎	◎	◎	◎	◎
●	7	揉烏帽子(もみえぼし)	◎	◎	◎	◎	◎
	8	辻風(つじかぜ)	○	○	×	○	○
	9	洛中(らくちゅう)	×	○	○	○	○
●	10	旧記	○	○	○	○	○
	11	狐狸(こり)	×	○	×	×	×
●	12	鷗尾(しび)	◎	◎	◎	◎	◎
	13	門の上	○	×	×	×	×
●	14	襖(あお)	○	○	○	○	○
●	15	Sentimentalisme (仏)	感傷癖	感傷癖	感傷的な態度	感傷的な気分	感傷的な気分
●	16	申の刻下がり	○	○	○	○	○
	17	薨(いらか)	×	×	×	○	○
●	18	築土(ついじ)	○	○	◎	○	◎
	19	低回	○	○	×	×	○

山 森 泉

	20	局所	○	×	×	×	×
	21	くさめ	○	○	×	×	×
●	22	火桶 (ひおけ)	○	○	◎	◎	◎
●	23	山吹の汗衫 (やまぶき・かざみ)	○	○	○	○	○
	24	棲	×	○	×	×	×
●	25	聖柄の太刀 (ひじりづか)	○	聖柄○	○	○	○
	26	鞘走らないように	※1 鞘走る	○	○	×	○
	27	やもり	×	×	×	◎	◎
	28	おし	※2	○※3	×	×	×
●	29	檜皮色 (ひわだいろ)	○	○	○	○	○
●	30	頭身の毛も太る	○	○	○	○	○
	31	しらみ	×	×	×	◎	×
●	32	弩 (いしゆみ)	○	○	○	◎	○
	33	執拗く (しゅうね)	○※2	○	○	×	○
●	34	検非違使 (けびいし)	○～の庁	○	○～の庁	○	○～の庁
●	35	蟻 (ひき)	○	○	○	◎	○※4
	36	なんぼう	×	×	×	○	×
●	37	四寸	寸○	○	○	○	○
●	38	太刀帯の陣 (たてわき)	○	太刀帯○	○	○	○
●	39	疫病 (えやみ)	○	○	○	○	○
●	40	菜料 (さいりょう)	○	○	○	○	○
	41	じゃて	×	×	×	○	×
	42	引剥 (ひはぎ)	○	○	○	○	×
●	43	黒洞々たる夜 (こくとうとう)	○	○	○	○	○

※1: 25「聖柄」の脚注の中で、「鞘走る」を説明している。

※2: 「執拗く (しゅうね)」の説明で、以下のように記されている。

「おしのごとく」は身体的差別用語を含む言葉であり、「おしのように執拗く黙っている」という例えは侮蔑的な表現として現在では使われなくなっている。

※3: 「口をきくことが不自由な人」と説明がある。

※4: 他社では「ヒキガエル」と言い換えのみであるが、「ひきがえるのこと。背に多数のいぼがあり、白い有毒な粘液を分泌する。」との説明がある。

5社の比較では、延べ語数43語のうち、重なる語句は23語であり、約半数の語しか一致していない。出版社別では最多34語、最少28語で数の上では6語の差がある。また、語数の違いだけでなく、語の説明内容にも違いがある。

たとえば、14「襖(あお)」をどのように説明しているかを比較してみよう。Ti社は「狩衣と同じ。もともとは公家の平服だが、庶民も普段着に着るようになった。(揉烏帽子の) 図の男が来ている服。Ta社「あわせ、または綿入れの衣」、To社「襖子(あおし)。脇をあけた仕立ての庶民の衣服。」Me社「あわせ。または綿入れの衣服」、Ki社「袷(あわせ)(裏地つきの衣) または綿入れの衣」というように、単に衣服の説明をしている注もあれば、どのような人間が着る服かまで説明している注もある。

15「Sentimentalisme (仏)」については、3通りの訳し方があり、Me社が改訂により変更する前の訳し方「感傷癖」をそのまま用いている教科書が2社ある。これでは、もう一度教師が説

明しなければわからない生徒もいるので、先に述べたように「注の補足説明が必要になる」ケースであり、脚注としては現在の生徒には不適切と考えられる。

さらに、35「蟄（ひき）」については、住んでいる地域にもよるが、ひきがえるを見たことも声を聞いたこともない高校生が大多数であろう。にもかかわらず、3社は「ひきがえる」と言い換えて終わっており、Me社はそこに図が付け足されている。Ki社のみが、「背に多数のいぼがあり、白い有毒な粘液を分泌する」と、特徴まで含めて載せている。ひきがえるがどのようなカエルであるのかは、国語辞典でも調べられる。しかし、辞典によって説明が異なるため、雨の夜に死体から髪を引き抜く老婆の喩えとした蟄蛙のイメージが異なる。¹⁰⁾ いぼがある大きなカエルだけでよいのか、動作が鈍く、夜行性であることの説明は必要ないのか。さらに、「有毒な粘液を分泌する」という説明の有無により、受け取るイメージが変わってくる。

このように注一つのあり方を考えるだけでも、生徒の理解、教師の説明の仕方、作品の理解が異なってくると言えよう。逆に言えば、解釈の違いから注の付け方が変わってくる語もある。しかしながら、現代の生活実態からかけ離れた語句に関しては、できる限りの注を付けておくべきではないだろうか。

4. 注意語句の扱いの比較

次に、語彙や漢字力をつけるための、脚注以外の語句の扱いはどうなっているのかを比較してみよう。同一出版社の教科書において4冊に共通の語は12語であり、慣用表現を中心に上げられている。時代の変遷に伴う増減では、平成15年版が最も多く23語であり、語彙力が低下した生徒への対応による増加と見ることができよう。しかし、時代が下るにつれて注意語句が単純に増えているのではなく、昭和48年版に取り上げられていた「刻限」「何をおいても」「腐乱する」「未練」「侮蔑」の5語は、以後の教科書においては外されている。「羅生門」はどの時代の教科書においても、入門期の教材として比較的最初の部分に収録されており、また、改訂時期によって「羅生門」より前の部分に収録された教材は入れ変わっている。したがって、これらの語は「羅生門」より前の教材に出てきた語句であるために外されたのではなく、高校生の理解語彙と判断されたためであると考えられよう。

表4 改訂時期別 注意語句比較 (Me社教科書)

表中の印は、[●: すべてに共通 ○: 取り上げてある ×: 取り上げていない]を示す。

共通	数	注意すべき語として取り上げられた語数→	昭和48年	昭和57年	平成6年	平成15年
			18	13	18	23
	1	始末	×	×	×	○
	2	もとより	×	×	×	○
	3	格別	×	○	○	○
	4	刻限	○	×	×	×
●	5	衰微	～する	～する	○	○
●	6	余波	○	○	○	○
●	7	途方に暮れる	○	○	○	○

	8	何をおいても	○	×	×	×
	9	いわば	×	×	○	×
●	10	低回	～する	～する	○	○
	11	挙げ句	×	×	○	○
●	12	局所	○	○	○	○
●	13	逢着（ほうちゃく）	～する	～する	○	○
●	14	片を付ける	○	○	○	○
	15	大儀	×	×	×	○
●	16	高をくくる	○	○	○	○
	17	腐乱する	○	×	×	×
●	18	暫時	○	○	○	○
●	19	語弊	○	○	○	○
	20	未練	○	×	×	×
	21	合理的	×	×	○	○
	22	とうに	×	×	×	○
	23	成就	～する	×	○	○
	24	存外	×	×	×	○
	25	現に	× ※1	×	○	○
	26	侮蔑（ぶべつ）	○	×	×	×
●	27	大目に見る	○	○	○	○
●	28	冷然	～と	○	○	○
	29	あざける	×	×	×	○

※1：教科書本文の出典の違いにより、該当箇所が「現に」ではなく「現在」となっている。

表5では、出版社別に注意を促す語を一覧にまとめた。最も少ないTo社ではわずか4語しか取り上げていない上、「漢字の学習」の項目を含めても合計10語しかない。¹¹⁾ 最高はKi社の33語である。表4において、外された5語について他社の教科書での取り上げ状況を見るため表5では53語としているが、実際の総語数は49語である。このうち、5社に共通の語は慣用表現の2語だけ（表中の●印）であり、4%しか一致していない。また、最も少ないTo社を除いた4社間でも共通するのは5語だけ（表中の▲）で、ようやく10%の一致である。そのうち「局所」は脚注で説明されている教科書もあるので、実際には4語である。慣用表現だけに限ってみても、「暇を出す」「いとまもない」「人目にかかる」「念を押す」などを取り上げてない出版社もある。

同じ教材の扱いでもこれほどの開きが生じている。そうすると、語句の指摘が少ない教科書で学ぶ生徒は、教師がプリントで補足する場合、教師の語彙意識や熱意によって左右されてしまうことになる。また、意味調べは生徒個々人に任せるやり方の教師の場合、語句の意味を調べることに意欲的でない生徒は何もしないか、あるいは何を調べてよいのかわからず適当に済ませてしまうことも考えられる。

教科書所収の「羅生門」における脚注の比較

表5 出版社別 注意語句比較

・表中の印は、〔●：すべてに共通 ▲4社に共通 ○：取り上げてある ×：取り上げていない〕を示す。

・表内の「注」は、脚注(表3参照)として扱われていることを示す。

・語句数の「+」の後の数字は、脚注で取り上げられた語であることを表す。

※ Ta 社 △：注意する語句とは別に、常用漢字から重要なものを熟語中心に取り上げている語句。

他社と重ならない語句については、欄外に記した。

※ To 社 ×△：単元最後にある「漢字の学習」に、「次の語の読み方を確かめ、その意味を調べてみよ。」として取り上げられている。

共通		Ti 社	Ta 社	To 社	Me 社	Ki 社
	語句数→	12 + 2	20 + 1	4	23	33
	1 ひととおりではない	×	○	×	×	ひととおり○
	2 始末	×	×	×	○	×
	3 もとより	～ない	○	×	×	×
	4 顧みる	×	×	×△	○	○
	5 日の目	×	×	×	×	○
	6 格別	×	△	×	○	○
	7 殊に	×	×	×△	×	×
	8 ついばむ	×	×	×	×	○
	9 衰微	×	△	×	○	○
	10 暇を出す	○	○	×	×	○
	11 余波	×	△	×	○	○
	12 ～にほかならない	×	×	×	×	○
▲	13 途方に暮れる	○	○	×	○	○
	14 影響	×	○	×	×	×
	15 気色	×	○	×	×	×
	16 何をおいても	×	×	×	×	×
	17 いわば	×	×	×	×	×
	18 とりとめもない	○	○	×	×	×
	19 (聞く)ともなく(聞く)	×	×	○	×	×
	20 いとまが(も)ない	×	×	×	×	○
	21 低回	脚注	脚注	×	○	×
	22 挙げ句	×	×	×	○	×
▲	23 局所	脚注	△	×	○	○
	24 逢着(ほうちゃく)	×	×	×	○	○
●	25 片を付ける	○	○	○	○	○
	26 大儀	×	～そうに	×△	○	○
	27 人目にかかる	○	×	×	×	×
▲	28 息を殺す	○	○	○	×	○
●	29 高をくくる	○	○	○	○	○
	30 無造作	×	△	×	×	○
	31 おぼろげ	×	○	×	×	～ながら○
	32 腐乱する	×	×	×	×	×
	33 暫時	×	○	×△	○	○
	34 憎悪	×	△	×△	×	×
▲	35 語弊	～がある○	○	×	○	～がある○
	36 未練	×	×	×	×	×
	37 合理的	×	×	×	○	○

	38	とうに	×	○	×	○	○
	39	慌てふためく	×	○	×	×	○
	40	成就	×	△	×△	○	○
	41	声をやわらげる	○	×	×	×	×
	42	今しがた	×	○	×	×	×
	43	縄をかける	○	×	×	×	○
	44	のどぼとけ	×	○	×	×	×
	45	存外	×	○	×	○	○
	46	現に	×	×	×	○	×
	47	侮蔑(ぶべつ)	×	○	×	×	○
	48	口ごもる	×	×	×	×	○
▲	49	大目に見る	○	○	×	○	○
	50	冷然	×	○	×	○	○
	51	あざける	×	×	×	○	×
	52	念を押す	○	×	×	×	○
	53	襟髪	×	×	×	×	○

Ti 社：制限、遠慮、範囲、臭気、老婆、恐怖、好奇心、平凡

5. 終わりに

「読む」ということについて、二つの段階が考えられる。まず、そこに書かれている漢字を含めた文字を読んで、言葉単位での意味を理解することであり、次に文章で述べている内容を理解することである。本稿で述べてきた教科書における脚注・注意すべき語句の扱いは、最初の段階に当たる。

前項までで比較しながら見てきた結論は次のようなことである。現場の教師たちが生徒の語彙力低下を実感しているにもかかわらず、教科書における脚注は語彙力低下に対応しているとはいえない現状である。特に、注意すべき語句の比較では教科書間の一致率が低く、共通の教材でも語彙の捉え方に大きな差があることがわかった。語数に差があるだけでなく、取り上げている語にもばらつきがある。しかしながら、数多くの注意すべき語を挙げている教科書があるということは、それだけ高校生の語彙がないと判断しているからであるといえる。

成田は、小学校の教科書における国語科専門用語の基礎的研究を行っている。¹²⁾ これは、どのような語句を国語科専門用語とすべきか、どのように平易な語に言い換えるのか、どの語が何年生から使用可能であるかについての調査分析をしたものである。小学校段階でさえ未だ統一されていない状態であることから考えると、その後の段階で必修語彙・用語を規定し、さらに必要な脚注を付けていくことは容易ではない。

漢字は表意文字であるため、何となく分かった気になっているが、実は分かっていない語も多い。学生の実態を考えると、学生個々によってテキストに用いられている用語がどれだけ既知であり、一方でどれだけ未知であるのかは授業理解に大きく関係してくる。さらに、それを説明する授業者の「教え方」も、「分かる」ことへの大きな要素を占めている。したがって、近年言われているFDについて考える時も、今まで以上に授業担当者が、学生に「何を分からせたいのか」「学生が分かっていないのはどの部分なのか」を十分に把握しておく必要がある。それは語彙に

関しても同様である。

専門科目担当者の立場では、学生を前にしたときに専門用語そのものについては新出語句として扱い、当然説明を行うのであろうが、専門外の一般的な語句に関しては、一つ一つの説明をしない場合が多いのではないだろうか。実際 100 人の講義で、学生個々のレベルに合わせて「分かりません」という語句を逐一説明しては授業が進行しない。一方で、分かる学生にとっては、退屈な授業となりかねない。科目担当者にとっては自明の語であっても、多くの学生には「読めない、分からない語がある」という認識に立って授業を進めるだけでも、教授者と学生双方の距離が縮まり、「授業を作る」という共同作業がしやすくなるであろう。このような点についてきちんと把握したうえでそれぞれの授業改善の方法を考えないと、いたずらに大学生の学力低下を嘆くことになりかねない。指導を試みた者なら誰もが実感しているように、既に小学校段階から語彙が不足している入学生を一人前の大学生レベルに押し上げるためには、かなりの時間と労力を要する。¹³⁾ 筆者らは、学生のレベルが年々低下していることを「日本語表現法」の授業内で実感し、3 年前から慣用表現、言い回しに関する本を指定図書とし、語彙増強の一環として学生に取り組ませている。¹⁴⁾ 個々人の言語環境や読書経験の多寡により語彙量の差があるため、一斉授業内で扱える部分とそうでない部分があるからである。課題とした当初は簡単すぎるかと思われた言葉の使い方も、学生のレポートを見ると意外と知らない語が多いことを知らされる。

今回は学生の語彙力不足の一端を探るべく、教科書の脚注の比較を試みた。次稿では、望ましい脚注のあり方について、現場教師からのアンケートなどを基に試案を提示したいと考えている。

注・引用文献・参考文献

- 1) 馬場眞知子〔ほか〕「日本語リメディアル教育 日本語文章能力開発演習の試行と成果の検証」『メディア教育研究』第 11 号 2003 年 p.27-38
小野 博 「大学生の基礎学力低下とリメディアル教育」『総研ジャーナル』No.88 2006 年 p.18-30
小野 博 「大学生の日本語力の低下および大学におけるリメディアル教育」『日本学術会議報告資料』2001 年 p. 1-17
- 2) 田中規久雄 「法学日本語教育について」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第 3 号 1999 年 p.37-47
- 3) 「国語総合」は、それまでの「国語Ⅰ」の内容を改善した必修科目であるが、履修学年は指定されていない。ただし、「教育課程の編成に当たって、小学校国語、中学校国語の内容を全面的に受けた基礎的な内容の科目であることに十分配慮する必要がある」とされているため、現在 98% の高校生が履修し、そのほとんどが 1 学年次で履修している。高等学校学習指導要領（平成 11 年 3 月改訂）における国語の言語事項の内容では、「各領域の学習に役立つよう、目的や場に応じた話し方や言葉遣い、文や文章の組立て、語句、語彙、表記、漢字の読み書き、文法、国語の成り立ちなどを取り上げる」としている。
- 4) 有元 秀夫 読書教育実態調査 要旨「生きる力を育てるための『読書教育推進プログラム』の開発研究（平成 12～13 年度科学研究費補助金・基礎研究 C 2 研究成果報告書）
- 5) 有元 秀夫 同上 「問 4 あなたが教えている児童生徒は、あなたの子供の頃に比べて、国語の学力がどうなっ

たと思いますか。」表 1-10 より抜粋して表示。

www.nier.go.jp/arimoto/Recent/ReadPrgrm/pdf/summary/pdf 2006 年 10 月 10 日

6) 伊原 勇一 『頻出現代文重要語 700』桐原書店 1991 年初版発行 2001 年改訂版はしがき

7) 明治書院教科書編集部の協力を得て、注についての記載を調べた。教科書の適・不適を判断することが主ではないため、個別の書名を載せることはしなかったが、使用した教科書名は以下のものである。指導要領改訂による昭和 48 年施行の「現代国語 I」、昭和 57 年施行の「精選国語 I」、平成 6 年施行の「精選新国語 I」、平成 15 年施行「精選国語総合」、平成 19 年施行「新精選国語総合」(見本本)の脚注の変遷を調べた。昭和 57 年以降に一冊改訂教科書を出版しているが、羅生門に変更がないため、掲載していない。また平成 19 年施行の教科書もあるが、平成 15 年版と変更がないため、取り上げていない。

8) 「執拗く」の後に続く「おしのように」という語との関連で削除したことが考えられるが、不明。

筑摩書房の教科書では、以下のような説明を注に入れている。

「おしのごとく」は身体的差別用語を含む言葉であり、「おしのように執拗く黙っている」という例えは侮蔑的な表現として現在では使われなくなっている。

数研出版の「国語総合」では、「おし」についての脚注を施し、以下の説明をしている。

聴覚や音声機能に障害があるため、話をすることができないこと、あるいは人。差別的な表現として、現在では使われなくなっている。

このような扱いが妥当かどうかは、ここでの論点ではないので触れない。

9) 金沢市内の高校 18 校で使用されている 7 社の「国語総合」のうち、5 社について比較を行った。教科書の採択・優劣を決めるための比較ではないので、表には個別の教科書名、出版社名を載せていない。難易 2 種の教科書を出している出版社もあるが、同一教材の扱いは基本的に差がないため、難易による比較は行っていない。

Ti 社：筑摩書房「国語総合」、Ta 社：大修館書店「新編国語総合」、To 社：東京書籍「国語総合」、Me 社：明治書院平成 15 年「精選国語総合」、Ki 社：桐原書店平成 19 年「探求国語総合」

このほか、一覧表には入っていない 2 社、第一学習社「標準国語総合」、数研出版「国語総合」も見したが、中間的な語句数であった。

10) 生徒が調べる辞典が必ずしも最新版とは限らないため、筆者の手元にある辞典で調べたが、以下のように説明の開きがある。

- ・大辞林 第2版 ①カエル目ヒキガエル科の両生類の総称②①の一種。体長は7～15センチ。ずんぐりした体形で四肢は短く跳躍力は弱い。背面は暗褐色、腹面は淡黄褐色。耳腺がよく発達し、背には疣がある。一般に地上性で。繁殖期以外はあまり水に入らない。ニホンヒキガエル。ヒキ。ガマ。ガマガエル。イボガエル。
- ・広辞苑 第5版 1998、2003 カエルの一種。体は肥大し、四肢は短い。背面は黄褐色または黒褐色、腹面は灰白色で黒色の雲母紋が多い。皮膚、特に背面には多数の疣がある。また大きな耳腺を持ち、白い有毒粘液を分泌。動作は鈍く、夜出て、舌で昆虫を捕食。冬は土中で冬眠し、早春現れて、池や溝に寒天質で細長い紐状の卵塊を産み、再び土中に入って春眠、初夏に再び出てくる。日本各地に分布。ヒキ。ガマ。ガマガエル。イボガエル。
- ・旺文社国語辞典 第10版 ①ヒキガエル科のニホンヒキガエル。大形、土色で、背面にいぼ状の突起がある。がま。ひき。いぼがえる。②ヒキガエル科のカエルの総称。
- ・小学館 現代国語例解辞典 1985 第一版 ヒキガエル科の大形のカエル。体長10～12センチ。背面に大

教科書所収の「羅生門」における脚注の比較

小のいぼ状突起がある。後頭の両側から白い乳状の毒液を分泌。動作はのろく、夜出て昆虫、ミミズなどを食べる。がまがえる。いぼがえる。

- ・岩波国語辞典 第4版1988 カエルの一種。体が大きく、皮膚にはいぼがたくさんある。動作がにぶい。頭の両側から白色の毒液を出して難を逃れる。夜動きまわる。がま。ひき。

11) 平成19年本では、35「語弊がある」49「大目に見る」が加わっている。

12) 成田雅樹 「小学校国語科専門用語の理解度調査と考察」『秋田大学教育文化学部研究紀要』教育科学部門
60 p1-10 2005年

成田雅樹 「『小学校国語科専門用語候補の選定と望ましい教科書提出の検討』『月間国語教育研究』日本国語教育学会編 2006年9月 No.413 p.46-51

13) 塚本真也「日本語力の徹底訓練による文章作成能力の向上」『日本リメディアル教育学会 第2回全国大会発表予稿集』p.35-36

篠崎恒夫 「経営学の授業における日本語教材の活用」『リメディアル教育研究』第1巻第1号 2006年
p.45-52 及び、当日資料。

14) 神田靖子〔ほか〕『日本語を磨こう 名詞・動詞から学ぶ連語練習帳』古今書院 2002年

留学生向けの教材であるが、新聞の社説・コラムを中心とする文章を読みながら、「横やりが入る」「脚光を浴びる」などの慣用的表現を学べるようにしたものである。ユニットに分かれた目次にも約150の慣用表現が出ており、巻末の索引には約300語を載せている。本文中の「ことば」欄では、たとえば「浴びる」の関連語として「罵声を浴びる、避難を浴びる、質問を浴びる、賞賛を浴びる、火災を浴びる」などを学べる工夫がされている。

現在、本学4学科のうちの1学科において、指定図書として学習させている。